

「胃内視鏡治療—Strip biopsy の実際」

山口大学助教授・第1内科 多田 正弘 著

国立がんセンター東病院・副院長

吉 田 茂 昭

本書は strip biopsy の発案者としてあまりにも有名な多田正弘氏の手による胃内視鏡治療の成書である。しかし、通常の成書にありがちな、いわゆる技術解説書という範疇ではない。ここには、彼が大学院の学生時代からの恩師である竹本忠良氏によって啓発された彼の哲学が脈々と息づいている。その第1は、少なくとも内視鏡に携わろうとするものは、その歴史的な背景を知るべきであり、そこから何かを学びとる姿勢が不可欠であるということであり、第2は内視鏡における最大の基本は診断学であり、的確な診断を求める姿勢なしには何事も生まれないということである。本書においてはまずこの点が語られている。

また、strip biopsy の原点が、より正確な組織診断法の開発にあったことを知る人は多いが、本書の中ではその原点が今なお彼の中で生き続けていることを改めて知らされる。この点、現在の strip biopsy に対する多くの認識は誤っているのではな

いかと思われてならない。最近では、本法の適応条件として“術前診断で粘膜下浸潤が疑われる病変を除く”とする施設が多いが、彼は不完全な各種の深達度診断の誤診によって本来内視鏡切除の対象となるべき粘膜内癌が治療対象から除外されることを大いに危惧しているのである。つまり、彼は深達度も含めて正確な組織診断を得る方法論(診断的治療法)として strip biopsy を考案したのであって、そこには曖昧な術前診断との妥協は一切考えていないのである。

まさに、その点が彼の真骨頂なのである。彼は内視鏡診断における一切の不完全性を拒否することによって、初めて完成度の高い内視鏡治療法を開発できたのである。

初めに本書は単なる技術解説書ではないと書いたが、治療の実際についての内容は丁寧であり、また実証的であるため、大いに参考になる。特に把持鉗子やスネアの選択、局注の仕方、絞扼の手技、切除時の留意

点などについては、彼がこれまで一生懸命苦勞して完成した様々な工夫、コツなどが初心者にもわかりやすい。また、切除困難な部位に対する対応などについては章を起こして詳しく述べられており、専門医にとっても新たな発見が少なくない。更に、治療成績については圧倒的な症例数に基づいた、しかも長期間にわたる術後経過観察結果が示されており、術後観察における具体的な助言は大変ありがたい。

そして何よりも、若い内視鏡医にとっては本書を単なる教科書としてではなく、1人の若手医師が内視鏡に取り組み、様々な限界と格闘しながらも揺るぎない成果にたどりついた半生の記録として読むことで、今後の発展を担う第二、第三の多田正弘となる、そんな期待もうかがわせてくれる一冊である。

●B5 頁162 図38 写真29
カラー写真320 1998 定価(本体
15,000円+税) 円400

—医学書院 刊(☎03-3817-5657)